
私の父は、海賊です。

蜂蜜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の父は、海賊です。

【Nコード】

N9977I

【作者名】

蜂蜜

【あらすじ】

杉野高校の新1年生の今中ありす。彼女はクラスの自己紹介で、「私の父は、海賊です」と大声で言った。そのクラスメート、もといこの物語の主人公神谷秋と、秋と同じ中学校だった藤原とともに今中ありすに付き合っていくと、ある森に着いた。その森は地元では有名な人食い森。その中に入った3人はそこで反対世界に落ちてしまう。ありすは大丈夫というが・・・。

序章

一瞬、自分の耳を疑った。

一瞬どころじゃない。俺の中では数分の間時間が止まっていたかもしれない。

周りを見渡してみた。

みんな俺と同じようにポカんと口をあけてる。まぬけな顔で。いや、それはまあいい。

みんなポカんと、先生までもがポカんとしている。

そう。今は高校に入った新1年生による自己紹介がHRでされていたのだ。

順々に、出席番号1番から名前とドコ中出身なのかと、あと一言だけを言う。シンプルザベストだ。

俺はけっこう前の方だったから、緊張で心臓がバクバクして飛び出そうなのを人に聞かれるか聞かれまいかを心配して、いや、よく考えてみればそんなのが聞こえること自体可笑しいのだが、噛まずにせりふを言い終えた。

問題はその後だ。

女子と男子の席は半々で別れていて、先に男子が、終わったら女子が言うような感じだ。

そして、女子の1番が言った一言。

「東丘中出身の、今中あります。クラスの皆への一言は……」

私の父は、海賊です」

森の中で

シーンとなった教室内で、今中という女がイスを引く音だけが響いた。

今中は平然とした顔で黒板を見つめている。

コイツはヤバい。

そう思った。直感で。

見た目は美少女だ。

多分、このクラスで1位2位を争う可愛さではないだろうか。でも、俺は確信する。

コイツは変人だ。

その後の教室がどんなに緊張したかは・・・分からないだろう。今中が自己紹介を行った後、

その次の女子が言うか言うまいか周りをキョロキョロ見渡しているし、先生はメガネがずれているのに気付かず今中を見つめてるし、他の子も今中を（特に女子は）クスクス笑いながら見ていた。

「えー・・・まあ、ジョークもいいですねえ。ハイ」と先生が言う。

先生、それで乗り切ったつもりか……………。

「では次」

先生が一言いうと、クラスはまた活気を取り戻していった。

入学したてということもあり、俺ら1年生はHR後、すぐ帰るところになった。

でも、帰る準備をしているとモノズキな男子やら女子やらが今中の机の周りによってたかつて質問攻めをしていた。

「海賊って？ 貿易会社の間違いじゃねえの？」

ある男子が言う。

「わたしは真実を言ったまで。信じるか否かは貴方次第だよ」
今中がニコニコしながら言う。まるでバカにしてるみたいだ。

「でっでもお、海賊とか最近いるって聞くしねえ？ ……
って、それじゃああなたのお父さん犯罪者？？」

ある女子が今中をかばいながら、途中で路線変更をし父親のことを犯罪者呼ばわりし始めた。

おいおい……まあ確かに人身売買する海賊はここ数年増えてきてるけどね。

「ううん。そんなんじゃない。パパはとっても優しいの」
今中が答える。

……って、パパって読んでののか？ ほんとに海賊ならパパとか呼ばせなさそう。

やっぱ、嘘か。

俺が変える準備を整えてカバンを肩に掛け教室を出て行くこうとし

たとき。

「ほんとだよ。じゃあ今日、ウチ来る？」

はい問題発言はっぴん。

いいのか、こんなこと言って。

この1年間、いやへたすりゃ3年間はうそつき呼ばわりだぞ。

ホレ見る。周りの人間どもが笑ってら。

だーれも行かねえだろうな。

そんな俺の予測は、外れた。

誰も一言も発しないこの異様な空気。何とかしてくれ。

野次馬らも困惑した顔で見合わせている。

そんなときに、野次馬の輪の中にいなかった女が手を上げた。

「はい。アタシ行く」

えっ？

あなたもしかして、俺のマイスイートハニー、藤原ゆいさんでは？

藤原ゆいって言えば、俺の元中でめっちゃ有名なめっちゃカワイイ女の子だ。

茶髪のパワパワとしたその髪を撫でてやりたい。ってかお願い。撫でさせて。

いいや、今はそんなことどうでもいい。

さっきの問題発言 part 2をどうにかしないと。

「え？ 藤原さん行くの？」

俺は声をかけた。

藤原さんはニツコリ天使のように笑って、

「うん。だって海賊ってとてもカッコいいんだもん」と言った。

「そう。じゃあ決まりね」

今中が言う。

おいおい、いくら嘘でも藤原さん一人で行かせるわけにはいかん。よし、俺も行こう。

+ + +

そんなわけで帰り道は、俺と藤原さんと今中という中途半端な組み合わせになった。

なぜか藤原さんと今中は気があっていて、俺一人取り残されている。

その2人の会話に耳を傾けてみると……

「ありすちゃんのお父さんって、どんな人？」

「んーとねえ、すごく優しいんだけど、お酒に関してはうるさいなあ。なんかさ、どっかの貿易船からお借りしたお酒らしいよお」

「お借りつて・・・それって盗ったって事？ カッコいい」
「でしょお??」

てなわけで、俺は話に入りたくても入れない状況。

海賊とかいないってわかっててもこの2人の話聞いとると、なんかそっちの世界へ引き込まれそうだ。藤原さんも今中もどうかしてるよ。

つと。

俺の周りの紹介だけで俺の自己紹介がまだだったな。すまん。作者の計画性のなさが伺えるだろうか。

俺は神谷秋。かみたにしゅう“俺は”まっとうな道を歩んでるんだが、藤原さんといひ今中といひ、俺の周りには以上なほうにのめりこんでる。ほんとに助けて欲しいもんだ。

挨拶はこの辺にしといて。

俺たちはなぜか海賊とは関係ない森に向かってた。

「ねえ、ありすちゃん。ほんとにここ?」

「そうだよ。ま、行ってりゃ分かる。早く行こ?」

「う・・・うん」

「・・・・・・」

藤原さんもこの町出身だからこの山の事は知ってる。

藤原さんも気が乗らないようだ。

なんたつてこの森はこの辺では知らない人はいない、人食い森だ。この森を訪れた何人もの観光客が行方不明になっている。

この前新聞で見たんだが、この森で行方不明になっていた1人が白骨死体で見つかったとか。

やっぱ怖い。帰ろうかなあ……。

俺が情けなく後ろを振り返った時、すでに森の入り口は消えていた。

入り口が見えなくなるほど奥には来てないはずだ。だってこの森に入ってからまだ1分と経たないんだから。

何か寒気がする。

まるで本当に森が生きてるかのようだ。

っておい、話の路線ホラーに変更!?

俺こんなの耐えられん。

「ねえありすちゃん。やっぱ……帰らない? もう暗いし」

「森の中にいるから暗く感じんだよ。もう少しだから」

「おいおい。藤原さんのいうとおりだ。もう帰ろう」

俺がそういうと今中にはやっと笑って、

「秋って男のくせに弱虫なんだねえ」

と言った。

いくら俺とは言え、女にバカにされちゃ黙ってられん。

「ふざけんな。テメエこそ何のつもりで俺等を連れてきたんだよ!? 今振り返ったら森の入り口消えてたぞ!」

俺がそういうと、藤原さんは「えっ」と困惑した表情になった。

「あんたたち知らないの? この森は1種の動物なんだよ。あんなだつて口をあけたり閉めたりできるでしょ? この森も生きてるから口を閉めれんだよ」

コイツ……本気で頭がおかしくなつたか!?

「あのなあ……」

俺が理論でこいつの妄想を止めてやろうと口を開きかけたとき……

・・・

『うおおおおおおおお』

何かの唸り声が聞こえた。声はとても低く、楽器で言うとコントラバスぐらい。

その唸り声は木々の枝、1本1本に当たって跳ね返り、また当たっては跳ね返りの繰り返りで森中に響いた。
そして地響きも。

「な、なんだ？」

俺が周りを見渡している時、

足で踏みつけていた地面がすつとなくなった。

一瞬浮いたような感覚がして、条件反射で下を見ると、地面にポツクリ穴が開いていた。そしてその穴はどんどん広がり、今中や藤原さんの足元までをすくっていた。

「きゃあー！」

「どうなってるんだこれ！！」

俺と藤原さんが落ちながら混乱している時に、今中は笑ってこう呟いた。

「やっときた」

重力に逆らわれず、どんどん下に落ちていく。
そして気付いた時には

そこは日本じゃなくなっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9977i/>

私の父は、海賊です。

2010年10月9日21時19分発行